序＝断片的ヴィジョン（９）

～１９９１年６月～

大学闘争・・・に関する批評～資料・集（＊）の　序＝断片的ヴィジョン（１）～（９）《特集》

（＊）現在までに　マスコミ篇　通巻９号まで刊行（６号は未刊）

［　１９６９・９（上・下）
　１９６９・１（上・下）
　１９６９・２（上・中－１・中－２・下）］

仮装被告（団）

目次

序＝断片的ヴィジョン（9）　～1991年6月～　1

序＝断片的ヴィジョン（1）　～1988年9月～10月～　4

（2）　～1989年5月～　5

（3）　～1989年9月～　7

（4）　～1990年1月～　8

（5）　～1990年5月～　10

（6）　～1990年5月～　11

（7）　～1990年10月～　13

（8）　～1991年2月～　15

序＝断片的ヴィジョン（9）

五七五・七七ヨツギ・トワ
イマ・カツサトリ
ヒフミヨイムナヤコト

既成の秩序時間でも、自然時間（宇宙時間）のみへの依拠でもない、時空間性の発見――発生的時空～マノスべの逆序的時空――への感受を失ったまま、性や詩や短歌や爆弾や＜　＞や・・・その他なにを論じても、脱落するものがある。

大学闘争ともよばれる１９６９年～の時間性・情況の根拠から、いま、ここでは、言葉の原基にかかわる＜日本＞語の韻律～音韻の本質についてま（言）う。

闘争過程～渦中におけるウタ～詩の不可能性をトキの根拠からとりだすことのないまま、また、風土的、日本的＜知＞の水準と型へのゲバルト～強制振動なしに、闘争後に、短歌的抒情～形式に引き寄せられる存在。その引き寄せられ方のパターンの究明←→それなくしては６９年～は無い。

短歌型が〈敗〉にたいして救いの器であるように感じとる個があるとすれば、それは、マの〈母〉性のアマウツシ法～天然（アマ）による強制振動（ゲバルト）～アマウツシとして＜５・７・５・７・７・・・＞が在るゆえに、である。

この拍～詩型～方法を与えられてあることのおおいさに匹敵し越え揺るがすウタはマレ。

宇宙もタエズ進化し変遷している。

任意の音やしぐさや～タチイフルマイや・・・に情況・宇宙のタエザル現在的テーマをタエマナク越える原理・方法・根拠・速度・～をこめえているか。イノリ～マノスべ（の振動波）を発シ得ているか。

現象しようとするもの、状態、音や心的状態、・・・に思いをいたすトキ、一瞬生ずる無音のマ。――カム・アマ交流。潜象から現象への過渡。正反振動。同期発生～共振のカムウツシ。――その一瞬 環境のアマと脳～身体のアマナの共振作用の発生（同期発生－－－－同じ振動数～波形が相互に同時に発生している状態）。

それを最も原初的な音・つぶやき・・・・しぐさ（踊り）をふくむ任意の方法で表現することによってはっせいするアマウツシ。

アマ始元量（カム無限量）が人間の直観～思考の能力と重合した時、真の〈創造〉が発生。

８拍子（音数にかかわりなく。）と無音のマ（その本質はカムウツシ）。――このリズムが＜日本＞語～＜日本＞人～＜　＞人・・・にとってアマウツシの方法でありうるのはなぜか？

この問いはバリケードを持続し、入試中止を持続しうる根拠の提起にかかわる。

標準音（律）としての５・７・５・７・７・短歌型リズム、あるいは７・５ウタ（ヒ）。

規制力、拘束力、精神的枠組みとしての緊張～乗り越え。しかも無限カムに通ずる回路として開かれている。

7（8）→5。このリズムは一気に、一瞬～永続（無限）への振幅をもつ時間飛行・空間移動を可能にする。その回路～乗り物としての拍。宇宙的関係の抽象原理そのもの。宇宙原理を抽象する根本数（カツ）がくみこまれている。
また、それを通過することで発生しうる存在転換がどのレベルのものか？を＜拍＞の根拠そのものによって問われている。
８拍。＜８＞（ヤ）は無限・極限飽和安定の数。極限循環律。モノ～コトが運動するのは、この安定の状態を求めて＜７＞で変わる。＜８＞の安定状態はイマタチ、部分的には見られるが、全体が安定停止することは有り得ず、運動系としては、つねに＜７＞の周期をもって繰り返される。
＜７＞（ナナ・ナナヨツギ）――カム・アマムカヒ（対向発生）により万象が発現。その万象の変遷には４：３の数に規制された＜７＞の周期性がある（カム４アマ３で無限に繰り返す）。
＜６＞で規制される立法体（オ。六方八軸の立体）。
＜５＞（イツツ）――微分された粒子（イ）の個々（ツツ）。イカツミ・マクミ・カラミ・トキ・トコロの五素量をさす。
＜４＞――四相をもつもの（ヲ）。
＜３＞つの方向（アカ・アヤ・アオ）。
＜２＞の正と反。
＜１＞（ヒ）――アマの元。
＜９＞――コ。ヤとヒの加算。
＜１０＞――ト。統合を意味。また正反重合をも表す。
＜コト＞は統合にいたる過程の繰り返しの周期性をも意味する。即ち＜ヒフミヨイムナヤ＞の進行（左まわりのアワの力）から＜コト＞とつぎ（次ぎ・継ぎ）の段階に上がり、渦巻き状にまた＜ヒフミヨイ＞と進行（向上）する。＜コト＞とは、認識の過程であり、コトバを可能にする根拠である。
詩歌やウタヒや能・農・武・脳・舞・歩・・・をふくむ詩的リズム～ジャンルを越える＜　＞リズムの拍～迫には、＜１２３４５６７８９０＞（ヒフミヨイムナヤ・コト）の全要素～本質が本来ふくまれている。サトル（アワの微波動鍛練により存在転換する）度合いが、発生的時間（逆序的時間）の本質を生きる。
また、８拍といっても、単に等時拍ではなく、むしろ予見できない気合で未来～未宇にむけてヒトツずつ刻みつけるもの。速度は一拍ごとに変化する。

言語にとっての美とは、アマウツシとしてのヒビキ、カムウツシとしての拍（リズム）。
情況からの促迫を、無音のマから、ｎ個の性として、サヌキ・アワの波動量鍛練として、まさに不可視のアワをこそ鍛えるために、そしてその度合いでサヌキとしての情況の質をも転換しうる根拠から、えらびとる。
その一瞬、駆け抜けるアマハヤミ（カムウツシ）、エネルギー補給（アマウツシ）。
サヌキとして出現（現象）する直前の潜象過程～アワの飽和としてのマ～気迫。イキの根拠。そして、そのようにして発生する現象としての拍も、本質は、一拍ごとに未～にむかって自在に刻む、又、現象としての音も、本質は、一音ごとに未知の宇宙律～＜　＞を発見～共振しつつ発せられる。

一音発すれば全宇宙にヒビキ、物質・現象・関係の生成過程に影響を与え、むしろ方向軸をつくり触媒作用をなし・・・。

表出者の内在的選択とみえるものが、宇宙律による構成から促されているものであることの無意識。

人間の耳が音として聞き取りうる変換装置の幅を越えているため、声の音域としては持たないようにみえる存在も、その発する振動波がアマウツシかつ宇宙律を奏でつくりだしている。

（ｘ）韻律～音数律は　拍～マにひきよせて、

［拍と音数の重合］（カムウツシ）

↓意識を越えてたちあらわれてくるもの。

潜象の環境側に用意されてあるカム－アマ　ムカヒ。

（ｙ）音韻は、音素の組み合わせ～音の基底思念（音素の基底思念↓音節の基底思念）にひきよせて、

［母音と子音の重合］（アマウツシ）

↓一瞬ごとの決断・選択・あるいは根拠　として、共振として、ヒトの側が用意（発）するもの。

としておのおの対象化しうる。

（ｚ）このｘ，ｙの四相（正反重合・対向発生）により、カムウツシをよび、アマウツシ量は高められ言語美は発生する。――生の最初の、死の最後の鼓動を　発生的時間（逆序的時間）へと変換しつつ――。

～１９９１年６月～

仮装被告（団）

自らが投げ、投げ返された火炎に身を焼いた菅谷規矩雄が発した＜　＞としての詩的リズム－－－音数律に関するノート、その究明の越せない闇をアルコールに身を内部から焼くしかなかった（１９８９・１２・３０死）、未だ出会ったことのない彼のタマシヒ――とようやく対話を始めつつ。

序＝断片的ヴィジョン

本篇の発行作業 ――資料入手、編集、印刷――はすべて、無名の一少女の手になる。

わずかに読み手を想定しうるとすれば、新聞をふくむマスコミにふれることが決して日常～自明ではない人々、すくなくとも（二十）年以上その購読を宙吊り得る（らざるを得ない）人々、すべての資料が失われてありなおかつ自己史をふくむ人類史を対象化する言語表現がこれらのマスコミ以外にはない状況から、本篇を把握しようとする人々、自己史に関わる一切から巡礼――もしくは（Ａ３６７位相の）強制執行による押収～留置状態にありつつ、はるかな未～的視点から、大学斗争のエネルギーとその本質、人類史的根拠をとり出だそうとする人々、自からの存在的エネルギーの根拠、そのゆくえの不安～不確定さにうち震えうる存在、そして――。

また、例えば、松下昇についての批評集 γ～β 系作成過程の時間性の中で、自らの言語（失語）領域とその根拠を照射する契機を与えられている、と感じる存在。

大学斗争をふくむ＜ ＞～（ 一過程において 出会い、うみ出し、変革されつつある概念の＜文字化＞＜ ＞化作業を行いつつある過渡にこれを刊行する。

時の楔通信発行委託の提起（一九八七、三・三０）による、表現論的革命状況。（これについては前項との関連で別の場で展開）

大学斗争――

自己をふくむ人類史総体と現代世界そして＜日本＞への根源的懐疑、否定～の不可避性。↑それを生きるべき（仮装すべき）根拠と原理の発見、創出を 存在運動論～α、β、γ、…μ～全幻想領域を横断する存在的組織論として（において）必要とする世界的史過程。人類史的な転換波動の総体。

なによりも一瞬ごとの生き生きとした永続性の感受、発見。

（更にｎ項目 記すことは可能）

大学斗争のエネルギー、生涯を超える時間性に出会ってしまっている情況的＝人類史的熱気の質――その（新）次元的反乱（氾濫）の本質を その＜時＞を生き抜いた人々のむこうへどのように継承～伝達、持続、深化しうるか、その方法論を含む記述～表現論。

尚、本篇は中京地域（大和朝廷による支配～隷属化が早期に行われ、朝廷を支える生産的背景として保守的風土の形成。）に於ける報道＝名古屋本社版および大阪本社版を軸として構成している。

ひとつの文明のかたち～症状がくっきりと浮かび上がってくる。周辺記事は、多くはあえて原資料入手過程の諸条件のままに、そのものとして編集している。

一九八八年九月～十月

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（2）

大学闘争・・・に関する批評〜資料・集《1969年9月》――マスコミ篇第1号（上・下）に続いて、《1969年1月》――マスコミ篇第2号（上・下）を刊行する。

いうまでもなく、過去の事実性に関する固定的な資料というより（ではなく）、情況的（ ）周しつつ螺旋状に包囲〜運動していく（る）過程に関する表現かつ資料として編集している。

大学闘争とその深さを媒介する以降の諸情況をうみだしている波動の本源にあるものを（20）年〜（ ）年という時間性の（ ）〜メヴィウスあるいはヒズミ〜ウズを包囲しつつ、取り出し応用する作業の一環としてもこの資料集作成を行っている。

あらゆるものにふくまれている・69――情況〜存在〜モノ〜ココロの転倒原理〜微粒子〜微波動〜――情況的アマ・カムウツシ・マノスベシ。

情況の原点からのあらゆるテーマを抽出し、各時間域の本質を自在に抽出・応用・変換し、生きる、方法的仮装。

〈科学〉を比ゆとする現代文明への重深的＊な問い――しかも全存在を賭けた問い。

＊何に基いて発生し、どの方向へ重なっているか、その方向軸と重心部の濃密さを示唆する用語。〜アマナの核力。そしてその実質は〈アワ〉。

〝だれでも（いつでも）踊ってるんですよ。〟（南山大学で　土方巽。およそ〈２０〉年前）。
耳をかすめるこの言葉のむこうへ　いま、時のヒズミを駆けて出会う〈少女〉（たち）は　ま（言）う。

言語以前に　また言語の前で
〈舞踏（踊）〉〜〈踊る（り）〉として　存在を日々、あらゆる一瞬に自己組織〈バリケード〉する。より、獣や超古代の生き物としてのヒト、生き生きとカンを働かせ裸足で生きていた（る）、に近く、また、それらをも時のヒズミに包囲しつつ、〈踊る（り）〉。
そのようにして　とり出しうる原初的〜情況的身（心）体〜全存在性。――全歴史的身（心）体〜全存在領域を一瞬ごとに包括して。
サンカーラー（脳の判断を生み出す無意識の第４過程の働き）の不可視の潜象過渡の働き自体を〈踊り（る）〉として〈全心身〉にとり出す方法論。　また、身体としての〈　〉。
しかも、だれにでも可能な方法としてとり出されていることにおいて革命的。すなわち、出入り＝刻々の意識〜無意識の変化、はぐれを総て包括する身体（から）の眼（差し）。

〜１９８９年５月〜　　仮装被告（団）

南山大学　ロゴスセンターおよび大学会館地下　《宣言》室　気付
〈　〉〜〜（闘争）委員会　（連絡先の一つ）

序＝断片的ヴィジョン（3）

劇と仮装。
場所を選ばず、突然はじまる。
あらゆる秩序的な時空間を越えて。
一人で（も）演ずる主体としての登場――条件。

言葉化された踊り。時空転移と応用。
踊り（あらゆる行為の瞬間、出入り＝刻々の意識・無意識の変化、はぐれを包括する身体からのまなざし）、――さらに、方向軸と照らすもの。〈拍子〉・〈間〉――その根拠～原理。
〈身体〉～〈　　〉の全器官にかかわる、イマ、イマの潜象を感受。その鍛練。
演ずる過程――波動量を鍛え向上～完全発揮する無限の階梯。――位相としての大衆団交。

ひたひたと耳もとに押しよせる時空間連続体。あるいは、多次元時空の一つのヴァリエーション。
また、自己否定としての原初性。

～1989年9月～　　仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（4）

大学闘争情況が 思想性として内包し、体現していた（る）いくつかのヴィジョンの基底にあるもの――。

＊ 女（としてのあらわれ～その背後にあるもの）としての自己の原存在からの出発。

――自然～歴史～自己史過程からの感受を対象化しなおかつそれを越える、存在的、情況的、文明史的転換の原理～方法論として。

〈女～アワ〉の本質は先天的に潜象共振の能力。〈カム〉のチカラ。目に見えない「潜象」。潜象物理的には、あらゆる現象は、〈サヌキ〉によって発現したものであり、それはすべて〈アマ〉始元量の変遷の相。→〈アワ〉は、そのカゲにあって、あらゆる現象を現象たらしめる〈カム〉性のチカラ。

性の原基を抽象すれば、〈サヌキ・アワ〉の物理（サトリ）。

人間の性向を抽象すれば、高次のサヌキ、低次のサヌキ、高次のアワ、低次のアワ。

また、サヌキ男、アワ男、サヌキ女、アワ女。

「男」とは何か？「女」とは何か？とは、〈サヌキ〉とは何か、〈アワ〉とは何か、

また〈アマ〉とは何か、〈カム〉とは何か、ということ。

〈アワ〉の性とは〈ミ〉の波動を出している力であり、〈イノチ〉の前駆流。

〈カム〉と〈アワ〉は対立するものではなく、〈カム〉の中に〈アマ〉があり、〈アマ〉には〈カム〉がつねに重合状態にあるもの。

〈アワ〉とは、その〈アマ〉の内にある〈カム〉の性。言いかえれば〈アマナ〉（アマが微分量として自然界の現象内に潜象として入りこんでいる）のもっている〈カム〉のチカラ。∴「アワ性」とは、女の本性であると共に、あらゆる生物の本質を発生させる潜在の力。

男女をとわず、またサヌキ型であろうがアワ型であろうが、もたぬ者のない〈アワ〉の性を、正・反の振幅（振動）をもって重合・錬成すること、自己のもつ潜在アワ量を開発すること以上に根本的な、緊急になすべきことはない。

＊ 対的な関係性を（が）、情況～文明を生き、かつ転換する存在の原理～方法としても問う（われ）た。――具体的な対関係の有無にかかわらず。あるいは不可能性の波動から。

この世とあの世の二元的交渉波。正・反・対向発生。宇宙のあらゆる関係、～域になりたつエネルギー発生の原理。――その応用。

＊α、β、γ、・・・μ～全幻想領域をつらぬく存在の自己解放～破形ウズ。

唐突に訪れる還元作用。あらゆる非証言域の対象化～応用。

～1990年1月～

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（５）

一瞬の呼吸停止
を　永続的に黙示する＜　＞
として、
通巻第６号を　不可視化しつつ、第７号　へと　跳躍する。

ゲーテ絶筆の三月書簡（１８３２年３月１７日）の根拠～波動量が、アマ～カム互換重合、正反四相、対向発生をふくむ潜象物理とともに人類（史）的に対象化され体現され得ている場合、＜甲山＞事件（１９７４・３・１７～３・１９）は現象せず、たとえ現象し得る場合にも、発生要因の潜象過渡からの解明は　発生・前に実現されている、と言い得る根拠を実践しつつ――。（倫理としてではない。物理として。）

＜光子＞・＜悟＞――その存在性・名（ナ）～音声思念・こそは、現代科学にとどまらない現人類の全～域の限界極を指し示し、それは法的審理においてすら影を落とし、＜被告存在＞に対する、逮捕、不起訴、再逮捕、起訴、無罪、破棄差し戻し、と、激しい揺れを生み出している。

また、＜１９７４年３月＞という情況下に、六甲山系の東端甲山で発生しているイミ。

＜ファウスト＞を＜封印＞して死んだゲーテの根拠（＜ファウスト＞の真実は、人類史的に未だ未開封。）に（も）共振し得る波動量を自ら鍛え抜く方向軸。

ナントシテモ　ソノ呼吸ヲ　浄化槽ノ汚泥カラ　ヨミガエラセナケレバナラナイ　――その不可能性の重力を、生命をかけて対象化～転倒し抜く度合いでしか、＜事件＞も、本質的な＜支援＞も、成り立たない――。

～１９９０年５月～

仮装被告（団）

大学闘争・・・に関する批評～資料・集　は、通巻第６号を黙示する不可避の構成要素＝特集号として、甲山（学園）闘争～甲山事件・マスコミ篇　を刊行していきます。

序＝断片的ヴィジョン（6）

あらゆる生命現象のみならず、宇宙のすべての現象の物や出来事が発現するには、必ずその前に潜象の過渡がある、ということを感受し、その根源に存在する潜象の存在（アマ始元量）を、物理として認識に出したのが潜象物理。

人間の精神作用には、（現実の意志や感情の背後に、）直接に意識することはできない無意識領域の過程がある。そして、その無意識領域の過程で、我々の無意識のうちに働いているモノがある。この機能を「潜象カン」としてとらえる。

――人間の意志や感情が現実にどのような現れ方をするか？そして、生まれながらの固有振動・の高調（正、反に振動する波動量の鍛練）――は、ひとえにこの「潜象カン」のアリカタ（態勢）にかかっている。

その故にこそ、「潜象カン」を鍛えることがいかに重要であるか？ということを＜認識＞に出すことが必要であり、それにより、自分に意識できないものをどう鍛えるのか？どうすれば向上させられるか？という問題に関心が引き起こされる。

この順序を経て、はじめて、自分の脳によって自分の心（意識できない内心の感受性、則ち潜象カンとよぶモノ）を教へるという逆序のサトリを実行させる基本態勢がととのえられる。

自分たちの生命を支配している潜象の存在を物理として認め、自分の進むべき方向（目標）を知り、それを自分の脳にオシヘル（逆序する）ことにより、自己の内心に、それを感受するアワ性を養うこと。則ち共振波動を以て、カムウツシ・アマウツシをよぶことの出来る「潜象カン」をヨミカエらせること。

このことは、アタマの先の理解ですむことではなく、生命の共振波動（＜ミ＞の生命カン）をもって、内心から変わらなければ、容易に実行し得えない。自己の内心に現状に対する疑念や真実を希求する思念を正直に発生することが、何よりも必要な条件。アタマが良ければ現象カンはいくらでも働くが、潜象カン（アワ性）が鍛えられていなければ、内心の変換・向上はあり得ない（智能的なアタマの良し悪し、智識の量、男女、大人子供、等に関わりなく成り立つ物理。）。

我々の生命を発生し、生存させている潜象の存在が、我々の個体に関わつてくる個体側の接点にあって働く機能＝潜象カン。アワ性（潜象カン）を養うことなしに、マトモな現象判断行為（サヌキ性）をだすことは出来ない。求めれば求める程、底の浅い大脳次元の空転に陥る。しかし、より真実のもの、より高次のものへとあくまでもつきつめていくアワ性さえ失わなければ、（則ち潜在アワ量があれば、）潜象カンは、ゲーテのように遂に極限にいたって転換（ペンドリング）せずにはいないもの。

天然に無限に存在し、＜イノリ＞のココロによって潜象の超光速粒子が同期発生（脳の遺伝子の「アマナ転換」）する＜カムウツシ＞。空気や食物より根源的な、直接アマの素量が注入される、環境からのイノチの補給ともいうべきモノの関わり＜アマウツシ＞。

＜言語＞発生過程、＜呼吸＞、＜食＞、＜性＞、・・・その原理。そして、文明なるものの内実、その転換の根拠――これら一切にかかわる。

個体側のチカラと環境側のチカラとの交流によって、宇宙のあらゆる生物の生命活動（人間、動、植物、鉱物、地球、天体、・・・）がいとなまれている。
個体の外にあってあらゆる生物を存在させているモノ（カムナ）であると同時に、個体の側に於いて、それを受け取り、それによって個々の生存を保っている、個体側の接点にあるモノ（アマナ）。それは、個体の内と外に存在するフタツのモノでありながらアマナによってヒトツに重合し互換しているモノ――潜象の存在。
アマ始元量とカム無限量。
微分量として我々の個体の内と外に存在するものであり、そのことをアマナ・カムナの交流として認識に出すことが、真の直観の基礎（感受性鍛練の根拠）となる。

～1990年5月～

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（7）

潜象物理入門（脳の感受性の鍛練）の＜実習＞の一つとして、
思考、直感、直観、　について整理してみよう。

『思考』とは、細胞社会で行われるもの。
それに対し、『直感』とは、細胞の独力で行われるもの。
力は力に親和し、あるいは反発する。力には力そのものが感応し、感能の単位は小さい。小さい単位で小さいもの同志、単独に共感する。アマの電気的感能も、そのような素量感能である。そして、いわば、それぞれの直感の感能の統計が『直観』なのである。
（「アマ」始元量はすべてのものの根源の素量であるが、それが微分して、「アマ」の身替り、あるいは出先機関のように私達の細胞に入りこんで、私達の生命をいとなむモトとなっている場合は「アマナ」と言う。したがって「アマナ」はオヤモトとも言うべき「アマ」にヂカに感応する。）

直感――細胞の中にあるアマナが、アマに感応することによって生じる感じかた。思考とは異った次元。
脳～全身の身体各部の、この感応状態を＜確認＞（さらには＜高調＞）することが、「イマのヒラメキを入れる」あるいは「身体（から）のマナザシ」ということにおいてなされる、基本的作業の一つでもある。――これは、マノスベの方向軸をもつ判断行為を生む。則ち、カムの＜ウツシツミ＞（＝カムミ＝日々刻々我々の環境に無限的に存在している潜象のアマ始元量のミ）の発生。さらに、微波動鍛練により、なにをするにもカムウツシを発生するスベ、どのような振動からも＜カムミ＞を対向発生しうる直観力を。

思考――アマナを核として成り立つ小宇宙というべき一つのマトマリである細胞の間の、からみ合いによって生じるハタラキ。
現象界に於ける判断の為には威力を発揮するが、客観できぬ世界の生命的な問題に関してはお門違いで、性能的にムリな仕事なのであるから、いかに努力しても錯覚誤解を連発する。

現代人のいうような感覚や知覚に基づく判断や観念の場合は、環境からの刺激を神経系の伝達によって、脳が判断する反応の仕方であるから、直観（生物体覚が基。したがって、環境からの刺激に、生体自体が反射的に反応する。）の場合より時間の遅れが大きい。
その為に、知覚による思考、観念、判断の作用は、アマの変遷のような、極めて迅速な変化にはついてゆかれないから、アマの状態は知覚にはのぼらない。それで、現実にはアマの相（スガタ）に触れて居ながら、知覚とはならず、アマの刻々の様相は感受できないのであるが、統計的な固定の残像が観念像として脳でつくられ、その残像から、自然の形象を追求することになる。それが自然科学である。したがって、ものが客観にあらわれる前のアマの消息は従来の自然科学の方法では、どうしても把握できないのが当然。

「原始感覚」が発揮されるには、低次の思考を伴う「判別性感覚」は邪魔になる。できるだけ判別性感覚を排除しなければ原始感覚は直観されない。しかし、その原始感覚を、スナオな直感のままに表現し認識するには、高次の思考が必要なのである。

一般に思考と直感は正反の関係にあり、思考が発達すれば直感がにぶるのが通例。それは低次元にあっては相反発して殺し合うが、しかし両者は両立してこそ真のチエとなりうる。（その為にもアマウツシ・カムウツシが必要。）

思考のハタラキ自体にも正反があり、①ものごとを限定し凝集しようとする面。②冷静に公平に客観的に判断しようとする面。

直感にも、①感情的・自己中心的な面。②宇宙的解放的アマ交流的な面。

ともに正・反・さまざまな洗練の度合いと、ヒズミ・ユガミ・ズレがある。

そして『直観』――直感に加うるに、人間に許容された「感受性」と「抽象力」との共役による「高度の判断」。要するに、体覚的に「感受」したもの、又は精神的にヒラメイた「直観」について、球感覚的に（現象追究のみでなく客観背後まで、）則ち潜象側にまでひらいた判断力の働く、人類最高度の精神現象をいう。

～1990年10月～

仮装被告（団）

序＝断片的ヴィジョン（8）

「・・・民族（個人、あるいは＜　＞をつけて他の概念に置き換えてもよい）の発生初期～形成期に強烈にインプットされ、反応型（～民族や個体としての資質）を形成した出来事～条件。――→その条件がないときにも、（なければつくってまでも、）同型反応を示す。――それによって生きのびようとする。・・・・・・」

人間側の諸要因をすべて解体。――強制振動にかける。
宇宙人類史の全過程・出生前から現在に至る、身につけた一切を。

ただアマ↓↑カムの振動波をきく。

宇宙に投げ出された発生過渡の生命体（知）。
発生条件をみずからつくりつつ（明示しつつ）、発生過渡～発生～生誕過程を振動波をもってたどりなおす。
（再）原初的混沌～眠り。

初期正覚（↓観念の脱皮）から
＜イノチ＞のサトリ（マノスベシ）へ。――生命の完全発揮の根拠と方法。感受性～カン～波動量鍛練向上の原理・方法。正反四相・対向発生。←→振動波の違いをカン（感受～判断～言葉化）じ得るか。強制振動と微波動鍛練。マノスベの共振波動と人間次元の大脳二次波動。

なお残りうる未分化な二重構造（のチェック）。
＜ニガテ＞も＜トクイ＞をも、自ら（アワ潜象域～アマからの）（あるいは69年の本質からの）強制振動にかける。――＜ニガテ＞＜トクイ＞＜閉ざされた無言（が外化させる）行為＞は同質の壁。カベをウチヤブル自在さ～衝撃波としての＜ゲバルト＞――振動波の高調。みずから（の＜　＞域）を強制振動にかけつつ、全存在～全情況～＜　＞（の死滅域）を強制振動にかける。

幻想のパターンとしての人間の拘束力すべてについて、である。

～1991年2月～　　仮装被告（団）